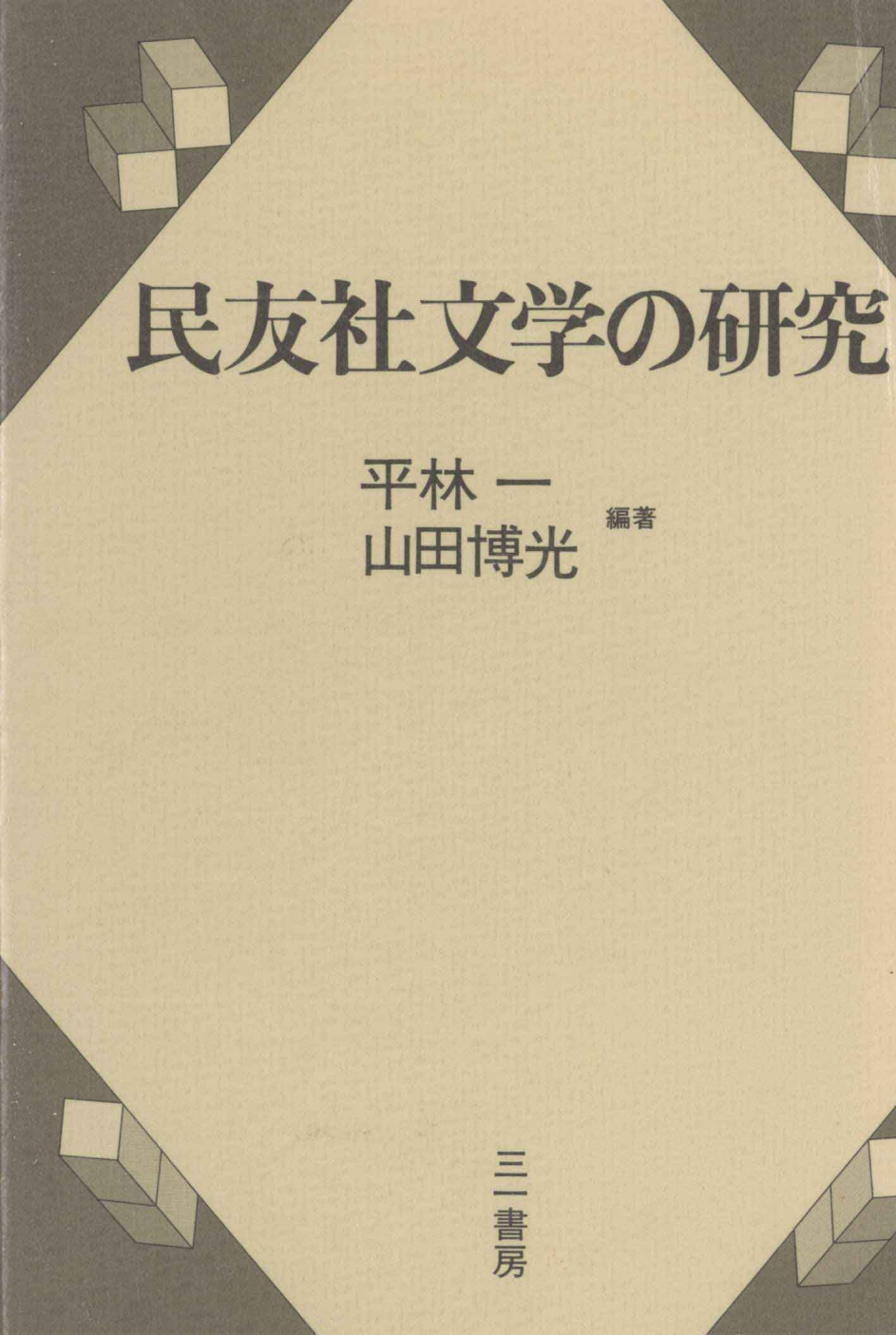




民友社文学の研究

平林 一
山田博光

編著

三
三
書
房

民友社文学の研究

江苏工业学院图书馆
书 章

平林一
山田博光
編著

民友社文学の研究

Printed in Japan

1985年5月31日 第1版第1刷発行

編 者 平 林 一
山 田 博 光
©1985年
発 行 者 荒 木 和 夫
印 刷 所 株式会社 厚 徳 社
製 本 所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代区田神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番

郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

はしがき

民友社文学研究会が発足したのは、昭和五七年八月のことである。三一書房の『民友社思想文学叢書』の企画が、その刺激となっている。

呼びかけは、平林一・山田博光両名によって行われた。その呼びかけの文章には、次のような記述がある。

さて、この度、三一書房が『民友社思想・文学著作集』（のちに叢書）六卷（のちに別巻一を追加）を企画・刊行することになり、私も二人もその編集委員になり、「文学」二巻を担当することになりました。

この機会に、かねてから関係者で話題になっておりました「民友社文学研究会」を発足させてはどうかと考え、御案内することになりました。出来うるならば、研究会の成果を『民友社文学の研究』として刊行したいと存じます。

文中に「かねてから関係者で話題になっていました『民友社文学研究会』とあるが、同志社大学人文科学研究所で民友社研究グループが組織されたころ（昭和40）から、民友社文学研究の集りをした」という話が関西の近代文学研究者の間であった。今は亡き辻橋三郎氏もまだ元気であり、熊本の中

村青史氏が労作『徳富蘇峰・その文学』をまとめられているところであつた。

八月三一日に發会した「民友社文学研究会」は、その後、八回にわたつて研究会を開いてきた。現在、本書執筆者以外の会員は、岡利郎・佐藤勝・西田毅・和田守の諸氏である。

文学史上、民友社はきわめて不遇である。明治以降、文学概念が狭められてきたことによって、史伝など硬文学主体の民友社の影が薄くなっているせいもある。人生相渉論争において「文学界」の透谷を是とするあまり、敵役の山路愛山はえてして否定的側面からしか顧みられず、ひいては民友社の文学も輕視される風潮があつた、というせいもある。文学遺産の継承の仕方として、これは大きな片手落ちであろう。（『日本読書新聞』昭和58・11・14）

これは吉田正信氏の提言であるが、まさしく、民友社文学研究は現在まで右のような情況が主流であつた。こうした民友社文学研究の情況をふまえ、われわれは民友社文学再検討を志したのである。今、民友社文学の全体像追究の作業は緒にいたばかりであり、われわれの研究も不備な点が多々あると思う。大方の叱正・批判によって、われわれはさらに研究を深めたいと考えている。

本書は、右のような経過と意図によって作成されたものであるが、いささかでも文学研究に寄与することができ、文学研究に関わる人々のみならず、一般教養書としても読まれるならば、われわれの喜びこれに過ぎるものはない。

昭和六〇年一月

平林 一

目 次

はしがき.....1

第一部 総論

1 民友社文学研究の位相.....平林 一 8

——人生相渉論争を中心にして——

2 民友社と外国文学.....山田博光 27

——『十二文豪』を中心にして——

第二部 各論

1 民友社の文学者たち.....山田博光 52

2 徳富蘇峰.....中村青史 65

3 山路愛山.....山崎國紀 82

4 宮崎湖処子.....北野昭彦 101

5 徳富蘆花.....吉田正信 124

6	国木田独歩	芦谷信和	149
7	森田思軒	喜多川恒男	174
8	石橋忍月	嘉部嘉隆	186
9	嵯峨の屋おむろ	北野昭彦	198
10	内田魯庵	堀井哲夫	211
11	山田美妙	高野静子	222
12	竹越三叉・塚越停春・平田久	平林一	236
13	人見一太郎・松原岩五郎・中村楽天	山田博光	252
14	金子春夢・角田浩々歌客	芦谷信和	263

第三部 資料

1	民友社の叢書・出版物（文学関係）	278
2	「国民新聞」主要記事目録（文学関係、明治23～27）	287
3	筆名一覧	303
4	参考文献	306
	あとがき	313

執筆者（掲載順）

平林 一 愛知女子短期大学教授

山田 博光 帝塚山学院大学教授

中村 青史 熊本大学助教授

山崎 國紀 花園大学教授

北野 昭彦 大谷女子大学助教授

吉田 正信 愛知教育大学助教授

芦谷 信和 立命館大学教授

喜多川 恒男 大谷大学助教授

嘉部 嘉隆 大阪樟蔭女子大学教授

堀井 哲夫 京都女子大学教授

高野 静子 徳富蘇峰記念館学芸員

第一部 總論

1 民友社文学研究の位相

——人生相渉論争を中心にして——

平 林 一

(1) はじめに

本稿は、一九四五（昭和20）年から現在に至る民友社文学研究につき、各時期にどのようなことが問題になったかを考察し、研究史を概観することがその役割である。

しかしながら、民友社文学研究が硯友社文学研究や「文学界」研究に立ち遅れているとはいえ、相当多岐にわたっている。本稿では詳細な研究史論を展開することはできないので、詳細な研究業績は参考文献一覧にゆずることにし、人生相渉論争を中心とした問題論的考察にとどめた。然し、四〇年にわたる研究の流れには意を用いたつもりである。

四〇年にわたる研究史の中で、中村完が二度にわたってすぐれた民友社研究の要約をしている。そ

れは、近代文学懇談会編『近代文学研究必携』（昭和36・8、学燈社）所収『民友社』と『明治文学全集』月報57（昭和45・4、筑摩書房）所収『民友社研究展望』とである。二著述は、各時期の問題点を的確にとらえているので、先ずこれに従いながら考察を進めてゆくことにする。

（2）戦後の軌跡へ一九六〇年まで

〈戦後〉という時代の下限をどこにおくか。これは意見のわかれるところである。

一九六〇（昭和35）年の安保闘争は、戦後民主主義の内包する幻想に対する告発であり、敗戦につづく時代転換を迎えることになった。この闘争のあった翌年、文壇においては純文学論争が起こり、それはつぎの年までつづき、さらに戦後文学論争へ接続され、あらためて〈戦後文学〉の内実が検討されることになった。

本稿においては、一九六〇年ころまでを一応〈戦後〉と考え、このころに至るまでの民友社文学研究の大略を最初に考えてみたい。

戦後、はじめて民友社の思想・文学観についての総括的な論考をしたのは、吉田精一の『民友社の人々』（河出書房『近代日本文学講座』Ⅲ、昭和26・12）であった。文中、吉田は内田魯庵の『文学者となる法』（明治27・4）を引用した後、民友社派文学の特色を次のように書いている。

……即ち常に現実の社会と接触し、いわゆる世道人心に裨益する所があらうとするプラグマティックな志向は、常にこの派の抱いて忘れていないものだった。「国民之友」にのった小説は後

に「国民小説叢書」八巻にまとめられて単行されたが、これは先にいうとおり民友社の特色を語るものでない。それよりは魯庵の云っている「十二文豪」が或はもつとも民友社的といえるかも知れない。(略)民友社系統の文士には、終始實際的な性格からぬけ切れぬ所があり、従つて理想主義的であるよりは現実主義的であり、文芸を経世の手段と考え(蘇峰)、そこ迄徹せずとも文芸の社会的効用を重視し、或は文芸に於ける社会性を強調したのである。

民友社文学の特色の説明としては、大局的にみて筋の通つたものと考えてよい。これを出発点として、戦後における民友社文学の研究がはじめられた。

民友社についての思想史研究の側面からの戦後の本格的研究は、家永三郎『福沢精神の歴史的展開』(東大出版会『日本近代思想史研究』、昭和29・4)にはじまる。蘇峰・民友社の思想は、實質的には福沢精神の継承・展開であると家永は論断し、民友社の思想構造の解明を行つた。結論に近く家永は次のように記述している。

……さうして福沢から徳富への発展こそ、同時に日本近代思想の明治十年代の段階から二十年代的段階への発展に外ならないのであった。遺憾ながら徳富は次の三十年代に入つてからはあらぬ方角に逸脱して折角自分で築き上げた二十年代的段階すらも放棄してしまつたのであるが、徳富その人の思想の逆転にもかかわらず、彼とその率あし民友社の人々によつて社会に贈られた精神的遺産は別群の新しい担ひ手によつてみごとに継承され、明治三十年代の段階として発展せしめられて行つたのである。(略)明治三十四年安部の手で執筆された社会民主党宣言こそ、民友社の所謂平民主義が行くところまで行きついた論理的極致を示すものに外ならない。

家永は、福沢↓民友社↓幸徳・安部等という日本近代思想史を貫く相承発展の流れを示したわけである。さらに家永は、この観点から、雑誌解説「国民之友」(『文学』昭和30・1)において、思想界・文学界の「国民之友」の位置を記述し、かつ民友社の歴史的役割を分析している。先ず、家永によって、民友社の歴史的位置づけの追究が行われたのである。

昭和三〇年代に入り、文学史研究の側からはどのような探究が行われたか。

『講座日本近代文学史』第一巻・第二巻(大月書店)で追究が行われた。第一巻(昭和31・10)では小田切秀雄が『国民之友』とその文学グループ』を書き、民友社の史伝・史論は、「すぐれた個性が歴史をどのように生きたかを生き生きと伝えて、紅露の文学にあきたりぬ知識層にたいして文学の新鮮な代用物の役割をはたした」と述べ、「文学界」グループとともに硯友社文学に対立していた民友社派文学は、「文学界」グループとちがって素朴な向目的明るさを持ち、それによって大衆に結びついたとしている。これは民友社文学の一面を積極的にとらえたものと考えてよい。第二巻(昭和31・11)では西田勝が『日清戦争と文学』を書き、小田切とはほぼ同じ立場から民友社派の積極面・消極面にふれている。その後、飛鳥井雅道の『民友社左派と日清戦争』(『文学』昭和34・8)が書かれている。飛鳥井は、日清戦争を契機とする民友社内思想分化と対立関係の検討を通じて、民友社左派(内田魯庵・宮崎湖処子・嵯峨の屋おむら)の思想と文学に大衆的可能性をさぐっている。(ただし、ここで書かれた「民友社左派」については、後に山田博光『民友社周辺の文学論争』などにおける批判がある。)

この時期、注目すべき論稿として付け加えるものに白井吉見の『人生相渉論争』(筑摩書房『近代文学論争上巻』昭和31・10)がある。「人生相渉論争」は、一九六〇年代後半から一九七〇年代にかけて、

民友社文学研究の重要な論点になったからである。

臼井は、透谷と愛山が「もともとキリスト教という共通の地盤に立つ同陣営の仲間」であり、「もともと愛山とは深く相許した友人同志」であり、蘇峰に対してもともに尊敬と親愛をもっていたことをあげ、両者の思想的基盤の共通性を指摘している。それならば、この親しい友人がなぜ論争を展開したか。臼井は透谷を軸として、次のように記述している。

……『人生に相渉るとは何の謂ぞ』で、かれ（透谷—平林注）は愛山流もしくは民友社流の人生の相渉りかたを攻撃したのであって、逆にいえば、真に本質的な意味で人生に相渉るべきことの主張にほかならなかったことがわかる。（略）当時愛山にこの言葉（人生—平林注）の意味をたずねたところ、愛山はファクト（事実）の事なりと答えたという。つまり、愛山の用いている人生は、人間現存の有様という意味であって、人生とか、生命とかという意味とは関係ないことがわかったというのである。実用功利的な意味で役だつように文学が人生へ相渉ることを透谷は拒否したのであって、文学というかぎり、根柢的生命的な意味で人生に相渉るものでなければならぬというのがかれの主張であった。人生に対して、本質的な相渉りかたの足りない点で、かれは紅葉、露伴にも、蘇峰、愛山にも、巖本善治にも、ことごとく不満だったのである。

臼井の論は、共通の基盤に立った透谷と愛山が、それにもかかわらず、それぞれの思想・文学観の性格の相違から衝突しなければならなかった対立の構図を鮮かに示したものと云っていいだろう。

この時期、人生相渉論争について見解を述べたものに、笹淵友一『浪漫主義の誕生』（昭和33・1、明治書院）及び『文学界』とその時代上』（昭和34・1、同）の二著があるが、一九六九（昭和44）年に

至り、『文学自律と文学功用論』（昭和44・4、明治書院『講座日本文学の争点5』所収）で補充追究されているので、笹淵の見解については、次章で触れることにする。

（3）一九六〇年代

中村完は、『民友社研究展望』（前掲、昭和45・4）を次のように書き出している。

疎外論流行のあおりで、北村透谷を時代状況からの疎外原型と考える、疎外論適用の流行である。それを批判して、透谷を、そういう思想流行現象からの例外的疎外者としてとらえる考え方もある。透谷絶対の観点に研究者の「私」をはめこみ、透谷の眼鏡で透谷の敵対者をみることになりやすい点では、どちらもおなじだ。透谷が「文学」の範疇で明確に批判した民友社の問題は、問題のおもさのままに、「歴史」の範疇の問題として残されてきた。文学によって歴史をこえる透谷と、文学を限定して歴史にかかわる民友社とを、事実のおもさのままにはかつて、統一的にみる学問的基盤がやっとできた。色川大吉氏の『明治精神史』（昭和三九、黄河書房）や平岡敏夫氏の『北村透谷研究』（昭和四二、有精堂）は、そういう種類の仕事であった。

戦後も二〇年経過した時点における歴史・文学の研究の転機を示す文章である。それにともない、民友社研究もまたその風貌を変えてゆくことになる。

文学研究の側面に入る前に、色川大吉・鹿野政直ら歴史研究における民友社問題にふれておく。

前章において述べた家永三郎の民友社評価（福沢諭吉Ⅱ啓蒙主義、徳富蘇峰Ⅱ平民主義、安部磯雄・幸徳

秋水初期社会主義)に批判を示した色川は、民友社の中心人物徳富蘇峰の若き日の思想形成を、豪農民権家としての自立という原点から追究し、その精神構造を鋭く解明した。色川は、蘇峰の思想の本質を次のようなところにみている。

……これらの構想の提示(『将来之日本』・『新日本之青年』など——平林注)は、明治初年～十年代の、自由民権運動全体の実践によつてうみだされたプラスとマイナスの思想的課題をふまえて、直接にかれ自身が、日本の現実のデータを集約し、理論化するところからつかみとつてなされたものではなかった。むしろ第十九世紀世界の大勢に鼓舞された蘇峰が欧米民主主義思想により深く依拠しつつ、それを決定的な基準として、日本にあてはめ、日本の現実の十分な分析をへずに提示したという特徴をもっていた。

そうした思想構造の特徴から、蘇峰が田舎紳士→中等階級を担い手とした「下からの資本主義化」の構想は、明治二〇年代の歴史展開とともに崩壊し、それは蘇峰の全構想の破綻を意味するものであると色川は結論した。

色川大吉が蘇峰の思想形成を解明した後をうけて、民友社の思想構造の特質と歴史的効用を解明したのが、鹿野政直の『市民的変革思想の観念論的展開』(筑摩書房『日本資本主義形成期の秩序意識』昭和44・12)であった。鹿野の「観念論的展開」について、中村完は『展望』で次のように解説している。

……「観念論的展開」ととくという理由は、民友社の平民主義生産主義が、政治や「法を、その運用の次元で問題とする」原則をふまえて世論指導を「運用」「実用」の領域にかぎった点に、政治のリアリズムを批判する思想のリアリズムとしての力の効用と限界をみ、さらに、その「観